



Title	老年看護学実習の初期における学生の困難： 疾病や障害を持つ高齢者の自立に向けた観察の視点
Author(s)	高橋, 順子; 林, 裕子
Citation	看護総合科学研究会誌, 11(2), 15-23
Issue Date	2009-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/37959
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39001
Type	journal article
File Information	11-2_p15-23.pdf



老年看護学実習の初期における学生の困難 —疾病や障害を持つ高齢者の自立に向けた観察の視点—

高橋順子 林 裕子

(北海道大学大学院保健科学研究院)

Students' Difficulties in the First Stage of Clinical Practice of Gerontological Nursing —Aspect of Observation for Self-Reliance of Elderly People with Disability—

Yoriko TAKAHASHI, Yuko HAYASHI

(Faculty of Health Sciences, Hokkaido University)

要 旨

本研究は、看護学生が老年看護学実習の初期に直面する困難の中で、疾病や障害を持つ高齢者の観察に関わる困難を明らかにすることを目的とした。実習終了後に面接を実施し、学生が老年看護学実習の初期にわからなかったこと、困ったことを聞き取った。語られた内容を、疾病や障害を持つ高齢者を観察する点に焦点をあて分析した結果、【できる事を観察する視点がわからない】、【自立への目標がわかりにくい】という2つのカテゴリーが得られた。

以上によって、老年看護学実習の初期における学生の困難の中で、疾病や障害を持つ高齢者を観察するという観点における困難は、顕在する問題状況にとらわれやすく、内在する能力を見出し難いことが明らかとなった。また疾病や障害を持つ高齢者の自立を、高齢者に内在する能力を維持、拡大することも含めたこれまでとは異なる広い概念として構築することの重要性が示唆された。

キーワード：看護学生、老年看護学実習、困難、高齢者、自立

1. はじめに

加速する高齢社会に伴う社会的要請を背景に、看護師養成課程における老年看護学の教育内容は様々な変遷をたどった。1971(昭和46)年の改正カリキュラムにおいては「老年(老人)」と冠する授業科目は見受けられず、次の1990(平成2)年のカリキュラム改正において「老人看護」として、「成人看護学」から独立した。一方で、実習という教育内容は「成人・老人実習」のまま据え置かれた。その後1997(平成9)年のカリキュラム改正において「老年看護学実習」

として独立したことにより、「老年看護学」は高齢社会における看護を担う専門職育成を意図されたもの¹⁾として体系化された。

しかしながら後発の学問として体系化した老年看護学には、成人看護学と老年看護学との実習における学習内容の区別において“成人看護学実習の対象者も老人が多い”“成人看護学実習との違いを理解させることが難しい”という指摘があった²⁾。

大淵³⁾は、学生が病院での疾病中心の看護の展開から、介護老人保健施設などの高齢者の生

活を重視した看護への切り替えに戸惑う状況を指摘し、次のように述べている。学生にとっては高齢者の生活場面から看護の必要性を見出すことが難しく、看護の視点を切り替えるサポートが必要である。また内田ら⁴⁾が述べるように、病院実習に慣れていた学生が、老年看護学実習によって、治療中心の医療から生活やリハビリを中心とする看護実践モデルの転換を迫られるという実態も存在する。この看護実践モデルの転換とはすなわち、臨床の場に内在する『医学モデル』で高齢者を見ることの課題であると換言できる。医学モデルとは、病院という医療機関に存在する治療から回復への直線的過程をさし、看護における生活モデルの対極にある概念としてとらえられてきた⁵⁾。しかし、医学モデルを前提とした疾病の治療過程に沿うだけの看護であれば、高齢者に残されている生活するための機能に目を向けられない状況に陥りかねない。またその結果、高齢者の現有する能力を衰退させ、生活者としての機能を奪う可能性がある。医学モデルに対する前述した指摘は、医療そのものが抱える高齢者に対する課題のみならず、同時に老年看護学実習における学生の課題にも通底するものである。すなわち、学生の関心が、患者の疾病や症状に向けられる傾向にあり⁶⁾、実習において学生が患者を“生活する人”というとらえ方が弱い⁷⁾、などと指摘される状況である。したがって学生が実習において疾病や障害を持つ高齢者（以下、高齢者とする）と対峙した時、多くの問題を複合的に抱え、日常生活のすべてに援助が必要な存在であるのとらえる傾向にあることが考えられる。

また実際に学生は、老年看護学実習の初期に「(高齢者の生活を)細かく見るという意味がわからない」、「高齢者の自立、機能維持を目指すという意味がわからない」と混乱する状況が見受けられた。このような状況は、全てにおいて援助が必要であるように見える高齢者に潜在する能力を、探索的に観察する視点が確立していないためと考えられた。またこのように観察が

不十分であることにより、学生が高齢者の自立を目指すという視点に立って目標が設定できず、混乱する要因になっていることが考えられた。

そこで本研究では、老年看護学実習の初期に直面する学生の混乱や困難を感じる状況を詳細に検討し、高齢者を観察する視点において、何が学生にとっての困難であるのかを明確にし、効果的な指導のあり方を検討することを目的とする。

Ⅱ. 目的

学生が老年看護学実習の初期に直面する困難の中で、疾病や障害を持つ高齢者の観察に関わる困難を明確にし、実習の初期における効果的な指導のあり方について検討する。

Ⅲ. 方法

1. 対象者

A看護系大学4年次に在籍し、3週間にわたる老年看護学実習後、同意を得られた学生48名とした。本研究の対象となったA看護系大学の4年次学生は、3年次の段階で基礎看護学実習、成人（急性期、慢性期）看護学実習、母性看護学実習、地域看護学実習、老年看護学実習Ⅰを終了している。なお、老年看護学実習Ⅰはグループホーム、介護老人保健(福祉)施設等の多様な場での観察中心の実習であった(表1)。

4年次の老年看護学実習では3週間という期間において、介護療養型医療施設で生活する高齢者1名を受け持ち、他の実習と同様に看護過程を展開するというプログラムであった(表2)。

なお4年次の老年看護学実習にあたり筆者らは、疾病や障害を持つ高齢者の生活していく能力と現有する身体、精神機能を、学生たちが見出せることを目標とした。さらに「受け持ち高齢者の生活を詳細に観察し、何ができるのか、できそうなのか、内在する能力に着目させる」、「高齢者の能力を維持あるいは、最大限に発揮するという高齢者の自立を志向した看護を展開させる」と教員間で指導を統一して関わった。

表1 A看護系大学における老年看護学実習(3年次)の目的・目標

【実習目的】

高齢者を取り巻く保健医療福祉施設活動の実際を知り、看護専門職が果たす役割について学ぶ。

【実習目標】

1. 地域高齢者の生活を支援する保健医療福祉活動の実際を見学し、看護専門職が果たす役割について理解する。
2. 在宅高齢者が利用する通所リハビリテーション支援活動に参加し、在宅ケアの果たす役割について理解する。
3. 市内の特設福祉機器・用具の展示を見学し、在宅高齢者の生活支援のあり方について述べることができる。

表2 A看護系大学における老年看護学実習(4年次)の概要

【実習目的】

高齢者は加齢による変化に加え、複数の疾病を抱えていることが多い。このような高齢者の心身機能や疾病経過の特性やその家族を理解し、個々の高齢者の自立に向けた援助を他の専門職種と連携しながら看護を展開する基礎的な能力を養う。

【実習目標】

1. 高齢者やその家族との援助関係を築くことができる。
2. 加齢による変化と疾病を抱えた高齢者の自立に向けた計画を立案し、実践し、評価することができる。
3. 高齢者に対し、尊敬の念をもって安全に安楽に看護援助の実践ができる。
4. 自立に向けて、必要な医療・福祉サービスなどの関連職種との連携を図ることができる。
5. 高齢者やその家族に生じている倫理的課題について考えることができる。
6. 看護学生としての責任を果たし、主体的に学習に取り組むことができる。

《老年看護学実習概要》

4年次前期、介護療養型医療施設において高齢者1名を受け持ち、3週間の間に看護を実践する。

2. 調査方法

調査方法は、4年次の老年看護学実習を終了し、承諾を得られた学生に対して、半構成的面接法でおこなった。なお、面接内容は対象者の同意を得て録音し、後に逐語録を作成した。

3. 用語の操作的定義

本研究においては「困難」を、「老年看護学実習の開始1週目までに学生が、わからないと思ったり、困ったと感じた状況」と定義する。

4. 調査内容

老年看護学実習の実習開始から1週目までにおいて、何がわからなかったのか、何が困ったのかを半構成的に質問し、実習を振り返っての回答を聞き取った。実習1週目までの期間と限定した理由は、老年看護学実習に特有だと考えられる観察に関わる困難が、実習開始から1週目に最も顕在化すると考えられたためである。

インタビュー時間は1人10～20分程度とした。

5. 分析方法

調査協力を得た48名のインタビューをもとに逐語録を作成した。「老年看護学実習の1週目においてわからなかったこと、困ったこと」について語られた内容をB. Berelsonの内容分析⁸⁾を参考に文脈単位で抽出した。抽出した内容を類似する意味内容によって分類、表題をつけるという作業を繰り返し、抽象度を高め「サブカテゴリー」、「カテゴリー」とした。分類過程は研究者間で内容に一致を見るまで繰り返し、時期において再度検討することによって精度を高めた。

なお本研究では研究目的に照らし、高齢者の観察に関わる困難について語られた内容を分析対象とした。

6. 倫理的配慮

対象となったすべての学生にあらかじめ、調査の目的、調査は成績とは一切関係しないこと、参加協力は強制ではなく、断ったとしても不利益をこうむらないこと、個人情報特定されることがないことなどを紙面によって説明し、同意と署名を得た。またインタビューはプライバシーの保たれる個室にて実施した。なお、老年看護学実習の単位認定者、実習指導責任者とインタビューは異なる教員とした。

IV. 結果

対象となった学生の性別は男子学生 10 名、女子学生 38 名の合計 48 名であり、受け持ち高齢者の性別は男性 10 名、女性 38 名であった。受け持ち高齢者の年代区分は 60 代 3 名、70 代 8 名、80 代 23 名、90 代 14 名であった。受け持ち高齢者の状況として、車椅子、歩行器の使用を必要とする身体機能の低下した状態にある高齢者が 35 名、食事・排泄なども床上で行われているほぼ寝たきりの状態にある高齢者が

13 名、そのうち軽度～中等度の認知症を有する高齢者が 26 名、重度認知症の高齢者は 7 名であった。

老年看護学実習の初期において直面した、「困難」への回答として、《認知症への戸惑い》、《高齢者と何を話していいのか分からない》、《高齢者とどう関わったらいいか、拒否されるのでは》などを含む 119 の内容を抽出した。本研究においては、疾病や障害を持つ高齢者の観察に関わる「困難」に焦点をあて分析を試みた。その結果 52 の回答から、4 つのサブカテゴリーからなる 2 つのカテゴリー【できる事を観察する視点がわからない】、【自立への目標がわかりにくい】が見出された（表 3）。以下、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは《 》に示す。なお、学生の回答を「 」で表し、表現のわかりにくい箇所を（ ）にて記載した。

1. できる事を観察する視点がわからない

【できる事を観察する視点がわからない】というカテゴリーからは、《できないところばかり見て、できる事に目がいかない》、《見る視

表 3 老年看護学実習における困難、わからなさへの回答(抜粋)

カテゴリー	サブカテゴリー	記述単位の一部
できる事を観察する視点がわからない	できないところばかり見て、できる事に目がいかない	できないところばかり見てしまった できないことを埋めていくということしか考えられなかった 介助で行っていることはできないんだと決めつけてしまって できるところに目が行かず考えるケアも偏っていた この人はどういう可能性があるから、どういうことができるという風に考えて見れない
	見る視点、細かく見る意味がわからない。病気にばかり目を向けてしまって	患者さんを細かく観察するということが、視点も含めて難しかった 動作を細かく見ていくということを知る前は何をしただけのかわからず 対象者さんと関わって見ている視点、全然本当のところは見えていないとか 事細かに見ていかなければならないというのをできていない感じ 病気にばかり目を向けてしまって、生活の援助に頭が回ってなかった
自立への目標がわかりにくい	自立って何だろう。自分でできるということだけではない	今までは病気の人っていうのが中心。でも今回は治すことはそんなになくて 自立、機能維持を目指すというのがわからず、看護問題ではなく、ケアに焦点をあてる 安全で、でも自立できるような援助を考えていくこと 積極的な自立というよりも、維持しつつもってというのが前提で安全も考えて
	目標にすることがわかりにくい	良くなるわけではないとわかっていたので、何を身近な目標にして、どうい うことをしたらいいか 普通の成人は退院したいという思いが強い。でも今回だと帰りたくないとい うのがあって 目標にすることがなかなかわかりにくく、それに向けた観察が難しい かなり慢性的に経過して、問題も 1 つじゃなくいっぱいあるから

点、細かく見る意味がわからない。病気にばかり目を向けてしまって》の2つのサブカテゴリーが抽出された。

《できないところばかり見て、できる事に目が行かない》では、「できないところばかり見てしまった」、「できないことを埋めていくということしか考えられなかった」、「介助で行っていることはできないんだと決めつけてしまっているところがあった」、「この人はどういう可能性があるから、どういうことができるという風に考えて見れてなかった」、「できるところに目が行かず考えるケアも偏っていた」などがあった。

《見る視点、細かく見る意味が分からない。病気にばかり目を向けてしまって》では、「患者さんを細かく観察するというのが、視点も含めて難しかった」、「動作を細かく見ていくということを知る前は何をしたらいいのかわからず、細かく見る視点が教科書には全然載っていなかったから、考えなきゃいけなかった」、「対象者さんと関わって見ている視点、全然本当のところは見えていないとか」、「病気にばかり目を向けてしまって、生活の援助に頭が回ってなかった」、「今までの患者さんはすべて自立されている方だったので、今回は事細かに見ていかなければならないというのをできていない感じで、難しいと思った」、「成人と何が違うのかというのが自分の中で明確になっていず、どこが違うんだろうと考えるのが難しかった」、「患者さんができるのかできないのかわかりにくい部分があった。自分では頑張っているけど、不足している部分とかあった」、「1、2週目は細かく見るっていう意味が最初はよくわからなかった。3週目になってわかったが」などの回答があった。

2. 自立への目標がわかりにくい

【自立への目標がわかりにくい】のカテゴリーでは、《自立って何だろう。自分でできるということだけではない》、《目標にすることがわかりにくい》という2つのサブカテゴリーが抽

出された。

《自立って何だろう。自分でできるということだけではない》では、「今までは病気の人っていうのが中心。でも今回は治すことはそんなになくて、じゃあ自立って何だろうって戸惑った」、「自立、機能維持を目指すというのがわからず、看護問題ではなくケアに焦点をあてるといのが他と違って、どう看護問題を立てていいか困った」、「安全で、でも自立できるように援助を考えていくこと」、「自立って言うのに向かったとき、積極的な自立というよりも、維持しつつもってというのが前提で、安全も考えてっていうのが入るので」などがあった。

《目標にすることがわかりにくい》では、「良くなるわけではないとわかっていたので、何を身近な目標にして、どういうことをしていけばいいのかわからなかった」、「普通の人退院したいという思いが強い。でも今回だと家に帰りたいか聞いても別に帰たくないというのがある」というものから、「(今までは)退院という目標に向けて立ててきたと思うが、今回は目標にすることがなかなかわかりにくく、それに向けた観察が難しい」、「急性期(の実習)は特にやるが見えていて、術後合併症とかかわっていることが多く、老年だとかなり慢性的に経過して、問題も1つじゃなくいっぱいあるから病名がたくさんありすぎて処理できないとか」などがあった。

V. 考察

本研究の結果からは、学生が、老年看護学実習の初期に直面する「困難」の中で、高齢者の観察に関わる困難は、高齢者に内在する能力を観察する「困難」と、目標設定に必要となる看護の視点に関わる「困難」であったことが明らかとなった。

1. 高齢者の観察の視点

【できる事を観察する視点がわからない】のカテゴリーからは、学生が身体可動性や認知機能の低下した高齢者を初めて受け持った時の戸

惑いやわからなさが表出されていた。

学生たちは、「高齢者の自立」を目標に実習に臨んでいた。しかし、初めて高齢者と対峙した時、「全て援助を必要としている」、「介助を受けなければ自分では何もすることができない」と対象をアセスメントする傾向にあった。すなわち高齢者を、介助を受けなければ生活できない存在としてとらえる傾向にあることが推察された。

さらに学生は高齢者の顕在化した状態のみを観察し、内在する能力に着目し難い状況であった。これらは、高木⁹⁾が実習初期の段階で、学生がカルテに書いてあることを鵜呑みにし、表面的な事柄で理解する傾向にあると述べていることと類似する結果と見ることができる。そのため学生が高齢者に内在する能力に注目するには、実習の初期における教員の意図的な投げかけや観察への促しが重要であることが示唆された。例えば学生が援助すべきととらえている高齢者の生活行動を、本当にできないのか、なぜできないのかと確認する作業が求められる。つまり、高齢者の観察すべき視点として「援助すべき人」ではなく、「生活する能力を持っている可能性のある人」であることを意識して観察するための指導が必要であると考えられた。

一方、実習において学生は既習の「看護過程」によって看護を展開する。看護過程とは「患者の持つ問題を、看護師が関わることによって、最も適切な方法で解決できるように援助する過程」である¹⁰⁾。しかしながら「問題点をあげることに学生の関心が向きやすく、対象の全人的な理解や人間的な関心が不十分になり易い」¹¹⁾と指摘される側面も有する。

たとえば健康上の問題一つを考えても高齢者の場合、1人で多くの病気を持っており、病気の症状が典型的ではない¹²⁾。そのため学生にとっては多様な疾病に伴う問題状況そのものにとらわれ、全人的な理解への努力や、生活の機能にまで目を向けるといったことが出来難い状況があると言えた。すなわち疾病や障害を有する高

齢者であればなお、援助が必要なことや問題点、できない部分に視点が行きやすく、「病気にばかり目を向けてしまっ」、「できないところを埋めていくということしか考えられなかった」といった思考に陥りやすい傾向も否めない。

その結果、数ある目に見えた「問題状況」とらわれ、高齢者に内在する能力や、これまでの人生から培われてきた様々な、内在している生活する機能を見出せない状態に陥っていることが考えられる。

中島¹³⁾は、伝統的な医学がエイジングを生から死に向かう直線モデルであることを述べ、高齢者の健康を障害モデルに照らしてみることによって、高齢者の潜在的な能力を見落とす危険性について言及している。さらにはこれまでの老年看護が「ポジティブな老年看護観に基づく個々人の能力をアセスメントする訓練を欠いてきた」と看破する。すなわち高齢者のできること、あるいはできそうな行動は何があるのかという探索的な観察の教育が不足していたと言及している。これらの主張からも、高齢者に潜在する能力を探る探索的で肯定的な視点に立ち高齢者の能力を見極めていくことを意識的にしなければ、従来の医学モデルに追随した補完的なケアにとどまる危険性をはらむことが示唆されている。言い換えれば宮崎らが指摘するように「高齢者看護は問題解決志向型の援助方法だけではなく、高齢者が自ら自分自身にあった方法を見つけ出し、パワーを回復していくように援助すること(＝エンパワメントを生み出すこと)が重要」¹⁴⁾であるといえる。

2. 高齢者の自立とは何か

【自立への目標がわかりにくい】のカテゴリーから得られた《自立って何だろう。自分でできるということだけではない》、《目標にすることがわかりにくい》の2つからは高齢者における看護の方向性が必ずしも明確にはとらえられていず、そのため観察する視点に迷いが生じている状況がうかがわれた。

これまでに学生が関わった対象者の目標の多

くは、疾病を克服、あるいは抱えつつも元の生活へと復帰（または退院）していくという確実さを伴ったものであったことが予測される。それゆえに高齢者の現状が「退院が目標ではない」、「良くなるわけではない」であった場合、それまで学生が認識してきた看護の目標とのズレにおいて学生が混乱した可能性が考えられる。

さらに本研究においては、実習にあたって高齢者の自立を志向する看護を展開しようとしても、高齢者にとっての自立が、従来学生たちのとらえてきた「自立」とは異なる概念であることが推測された。広辞苑¹⁵⁾よれば自立は、「他の援助や支配を受けず自分の力で身を立てること。ひとりだち。」とある。また1960年代にアメリカから波及した障害者の自立生活運動の基盤となる「自己決定」こそが自立であるとする概念も存在する¹⁶⁾。しかし、身体機能、認知機能の低下など様々な障害を併せ持つことの多い高齢者と向き合ったとき、学生の多くはこれまでの自立の概念と高齢者にとっての自立の概念との齟齬を自覚する。すなわち学生が、対象者としての高齢者に対し、身体的な自立のみならず、精神的な自立をも見出したい状態に直面するためである。こうした状況からは、老年看護学実習の初期において、自立への目標設定をより焦点化したレベルでとらえる指導がなされる必要があると推察された。

つまり、「退院すること」、「回復すること」といった長期的目標を中心に展開するのではなく、今ある生活動作の何が少しでも維持されるのか、あるいは向上させうるのかという短期的目標をより具体化させることが重要となる。中島¹⁷⁾は老年者が自立において“積極的自立”と“消極的自立”を行きつ戻りつしつつ選択していると述べている。この“消極的自立”とは他者に援助を受けつつ生活を成り立たせることと解釈でき、さらに「このことを考慮せずに老年者の自立度を評価するなら、老年者に対する自立像は、そこからすでにゆがんでしまう」¹⁸⁾と指摘する。換言すれば、“消極的自立”にある高

齢者の状況を、単なる依存であるとはとらえずに、援助を受けて成り立つ生活であっても生活ができる主体的な存在であると認識することである。よって、その状態を維持していくことも高齢者にとっては自立につながるのだと考えていくことが必要である。また、高齢者にとって自立するということは、たとえ援助を受けている生活動作であっても、その一部を遂行できるようになることも自立であるにとらえていくことが求められる。すなわち、現状を低下させることなく維持していくことと、たとえわずかであっても生活動作における向上を目指すことが高齢者にとっては重要な目標なのだと再認識することが望まれる。

これらのことから既習の自立概念を高齢者のより広く多様な自立概念へと変革させられるような示唆を実習初期に与える必要がある。すなわち高齢者の自立は内在する能力の維持、拡大を含む広い概念であると明確に提示し、目標設定の置き方と、可能性を引き出す介入の重要性を示すべきであることが考えられる。

VI. 今後の課題

本研究の限界は、老年看護学実習における課題を、老年看護学の講義、演習の内容と連動させて検討していない点にある。学内において修得すべき知識、技術を現状の学生像、高齢者が置かれている状況と常に照らし合わせつつ、修正、検討されていく必要がある。今後、学生が学び得てきた知識、技術を実習課題との関連で評価しつつ、改めて学生の実習課題を再検討していくことが重要であると考ええる。

また教員間の指導内容の統一について、学生の理解に差異がなかったかどうかの検討がされていないため、今後の課題として引き続き検討を重ねる必要があると考える。

VII. 結論

本研究によって以下の2点が示唆された。

1. 老年看護学実習初期における学生の困難の

中で、高齢者の観察に関わる困難は、高齢者の頭在する問題状況にとらわれやすく、内在する能力を見出しにくいことである。

2. 実習にあたっては、高齢者の自立を、内在する能力の維持、拡大を含む多様な概念として明確に提示する必要性がある。

引用文献

- 1) 小玉敏江, 亀井智子: 高齢者看護学, 中央法規, 390, 2007.
- 2) 清水初子, 水戸美津子, 流石ゆり子: 看護系4年制大学における老年看護学臨地実習の実態と課題, 山梨県立看護大学紀要, 1(1), 41-53, 1999.
- 3) 大淵律子: 老人看護学実習での学び—老人福祉施設実習から見た効果—, 東京都立医療技術短期大学紀要, 9, 157-167, 1996.
- 4) 内田陽子, 新井明子, 小泉美佐子: 学生の老年看護学実習についての評価—学生のやる気を高める条件—, 群馬保健科学紀要, 25, 93-103, 2005.
- 5) 柳原清子, 千葉京子, 有馬千代子: 老人看護学実習における病棟実習から訪問看護ステーション実習への転換—医学モデルから生活モデルへ—, 日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要, 9, 21-29, 1996.
- 6) 葛西智賀子, 岩月すみ江: 成人看護学実習における〈選択実習〉の学び, 弘前学院大学看護紀要, 1, 65-82, 2006.
- 7) 佐藤まゆみ: 成人看護学実習における現状と課題—周手術期患者の看護実習より, Quality Nursing, 7(3), 243-246, 2001.
- 8) B. Berelson, CONTENT ANALYSIS: 稲葉三千男, 金圭煥訳, 社会心理学講座7 内容分析, 1-79, みすず書房, 1957.
- 9) 高木初子: 老年看護学において学生が身につけた実践知としての看護援助能力—意識的な振り返りを通して—, 自治医科大学看護学部紀要, 1, 55-67, 2003.
- 10) 小玉香津子, 高崎絹子: 看護学双書2 看護学概論, 文光堂, 64, 2003.
- 11) 佐藤幸子, 青木実枝, 井上京子他: 基礎看護領域における看護過程の教育方法—看護診断過程を中心に—, 山形保健医療研究, 6, 1-7, 2003.
- 12) 堀内ふき, 大淵律子, 金子昌子他: ナーシンググラフィカ 26 老年看護学 高齢者の健康と障害, 164, メディカ出版, 2005.
- 13) 中島紀恵子: 老年看護学克服すべき課題と論点 52(2), 教育と医学, 教育と医学の会(編), 33-39, 2004.
- 14) 宮崎和子, 水戸美津子, 江口美鳥他: 高齢者看護の基本と看護観察, 看護観察のキーポイントシリーズ 高齢者, 3, 中央法規, 2006.
- 15) 新村出(編): 広辞苑, 第5版, 1359, 岩波書店, 2003.
- 16) 安酸史子, 鈴木純恵, 吉田澄恵: ナーシンググラフィカ24 成人看護学—セルフケアの再獲得—, 45, メディカ出版, 2006.
- 17) 中島紀恵子, 井出訓, 植田恵他: 系統看護学講座 専門 20 老年看護学, 81, 2005.
- 18) 同上.

Students' Difficulties in the First Stage of Clinical Practice
of Gerontological Nursing
—Aspect of Observation for Self-Reliance of Elderly People with Disability—

Yoriko TAKAHASHI, Yuko HAYASHI
(Faculty of Health Sciences, Hokkaido University)

Abstract

This study aimed to clarify the difficulties that the student nurses experienced in the first stage of clinical practice of gerontological nursing. The participants were 48 student nurses who were in charge of observing elderly people with disabilities. At the end of the clinical practice of gerontological nursing, the student nurses were interviewed on the difficulties they experienced during the period of their clinical practice.

As a research method, the content talked about the difficulty when the student nurses observed the elderly people with disabilities in the interview was analyzed.

Results indicated two difficulties that were experienced by student nurses observing elderly people with disabilities, “to find their potential ability” and “to set the target according to their self-reliance”.

Therefore, it is necessary to strengthen the observation method and the improve the target setting in the first stage of clinical practice of gerontological nursing.

Key words : student nurse, clinical practice of gerontological nursing, difficulty, elderly people, self-reliance